

人には称賛するもののみ見える

コムニオーネ・エ・リベラツィオーネの
成人および大学生の「年度始めの日」
ビデオ配信 2020年9月26日

コムニオーネ・エ・リベラツィオーネ

© 2020 Fraternità di Comunione e Liberazione

Julián Carrónのテキスト

© 2020 Fondazione Meeting per l'amicizia fra i popoli

Mikel AzurmendiへのFernando de Haroのインタビューのテキスト

イタリア語から翻訳: Marcia Akemi Kaida/ Tomoko Sadahiro

表紙: William Congdon - *Virgo Potens*, 1985

パネルの油絵cm.90x75

©The William G. Congdon Foundation, Milano - Italy

www.congdonfoundation.com

年度始めの日
ビデオ配信 2020年9月26日

導入 フリアン・カロン

わたしたちの心が開かれ、わたしたちの協力なしで、神は何もできません。そうした開かれた心、物理的には離れていますが、今日一緒に参加しようという志を遂げることができるよう聖霊に願いながら始めましょう。

Discendi, Santo Spirito

わたしたちはまだ予測できない状況のまっただ中にいます。わたしたちは、ここ数ヶ月で何度、視点の誤りを示すデータを考慮せざるを得なくなり、予測を修正することを余儀なくされたでしょう!ですから、マリオ・ドラギがリミニのミーティングで話した《不確かさ》のために不安を持つことは理性的です。

報道されているニュースには、わたしたちが今話しているここイタリアでも、至る所で新しい謎に満ちています。学校や大学の問題、経済状況、雇用とビジネスの回復力に与える影響について考えてみましょう。新型コロナウイルスに関しては、ウイルス研究者が指摘しているように、他の感染症の場合と同様に再感染が起こり得るという事実は、《ワクチンの有効性に影を落とす》ものです。つまり、ワクチンの決定的な一撃に頼ることさえできないのです。わたしたちは守られておらず、感染のリスクにさらされたままです。

こうした概観にさらに心配な他の現象が加わります。どのニュースにも理由のない恐ろしい暴力が取り上げられ、考えさせられます。そして、起こること—新型コロナウイルスのような明白な現実に関しても—を認識する困難がますます広まっており、それはいわゆる進化した社会と言われるものにもっとも非理性的な否定主義をもたらします。

これらはすべての不明瞭な原因の兆候であり、わたしたちを内側から蝕むので、まさにそのためにわたしたちをますます無力にし、反応できない、効果的な反応を引き起こせない状態にするのです。これはウイルスのように、わたしたちの心の奥底を破壊し続け、すでにかなり脆弱な自己をさらに弱めます。誰かがこのような“不明瞭な原因”をニヒリズムと名指しする勇気を持ち始めました。ニヒリズムは《無との親密さのようなもの》、《価値に対して攻撃する知的能力を失い、あまり野心がなく、多くの場合外観は“普通の人生・生活”に見える[...]》。(アレッサンドロ二世を殺害した爆弾のような玉の入った銃より使用済みの缶に似ている) 使い捨てである¹と最近コリエーレ・デッラ・セーラ紙の副編集長アントニオ・ポリートが書いていました。

¹ A. Polito, «La violenza nichilista tra i giovani», *Corriere della Sera*, 17 settembre 2020. 逐語訳

わたしたちを襲う一層深い恐怖は、その症状の主な部分です。ますます広がっているこのニヒリズムをもっとも明白に裏付けるのは、逆説的に、ニヒリズムの否定主義者、“無を否定する人々”です。新型コロナウイルスを否定する人々のように、それを直視することへの錯乱した恐怖のために現実に立ち向かうことができないのです。わたしたちは、起こった恵みによって、あえてそれに目を向けることができるのです。

このような状況を前にして、わたしたちは、恐怖をコントロールしながら問題を解決しようとする人のように諸症状に打撃を与えようとするのか、その諸症状の原因を突き止めて対抗しようとするのかを決める必要があります。

若者は、その遠慮のなさで常に挑発するので、わたしたちが不十分な答えに甘んじることが防ぎます。ある教師が《彼ら全員に衝撃的な意味[無に答えるもの]への渴望があります。わたしは、今年の夏一人の女子生徒に“先生、わたしたち若者に人生の意味、日常生活の味を伝える人が必要です”とつきつけられました。さらに彼女は“意味や幸せに関する問いに恐れを抱かなくてもよいことを示す人が必要です”と言うのです》と書いてきました。

このような要求は、わたしたちに今起こっているドラマを理解させます。それは、存在と無の間の戦い、日常生活の味わいと内側からわたしたちを捕らえる空虚との間の戦いです。全身全霊で立ち向かわないなら、わたしたちはこの横行するニヒリズムの、まだなっていないなら、次の犠牲者になります。

この戦いの性質を簡潔に説明するために、わたしたちはよくニーチェの《事実は存在しない。解釈のみである》²という、彼のニヒリズムの極端な結果を表す表現を使用してきました。わたしたちが被るこの立場の影響は、どの解釈が忠実に事実を承認し、経験に裏付けられているか分からず、無数の解釈に振り回されることです。どの事実も解釈の同等性からわたしたちを引き出すほど“とらえる”ものではないのです。すべてが同じに見えるのです。

《事実は存在しない。解釈のみである》というこの公理に挑戦できるものはありますか。わたしたちが没頭している“情報”社会に、区別できない大量のどれも同等な解釈に挑戦できる事実はありますか。あの女の子やわたしたち一人一人は、無に打ち勝つ存在が認められると思える何らかの手がかりをどこで見つけることができますか。

もっとも象徴的なケースは、この数ヶ月で様々な機会に何度か繰り返している一常に思い浮かぶので—イエスによって癒された、生まれながらの盲人の話です。

生まれながらの盲人が視力を得るといえるのは出来事です。《目の見えなかったわたしが、今は見える》³と彼が繰り返し言うように。事実が起こるやいなや家族、隣人、ファリサイ派の人々の間で可能で想像できるすべての解釈が勃発しました。奇跡の後、イエスがこれらの解釈の騒乱の中に彼を一人で残すことを恐れなかったことに驚きます！けれども、あの盲人は一瞬たりとも混乱することなく、自分に起こった事実について少しも疑いを持た

² Cfr. F. Nietzsche, *Frammenti postumi 1885-1887*, in Id., *Opere*, Adelphi, Milano 1975, vol. VIII, fr. 7 (60), p. 299. 逐語訳

³ ヨハネ 9,25 参照

ず、出来事を尊重しない解釈に一步も譲りませんでした。

しかし、注意してください。生まれながらの盲人はすぐにイエスに加担しません。まず、現実に従い、事実を認め、出来事に忠実であるのです。《目の見えなかったわたしが、今は見える》ことに。彼にとって重要なのはこの真実の明白さであり、彼の中で輝く—《目の見えなかったわたしが、今は見える》—そのことがイエスに加担させるのです。癒された盲人の選択はイデオロギー的なものでも、政党を支持するというものではありません。ですから、見えるという明白な事実によってイエスを認めることに至ったのです。癒された盲人は、我を忘れて自分の解釈を頑なに押し付けようとせず、唯一事実(今は見え、このことはイエスという名の男によって起こった)を踏みにじらない人です。他のすべての人は、この事実を否定して、現実の明白な事実に関心のない自分のイデオロギーを覆いかぶせようとします。イデオロギーは、偏見や何かを守るために事実を消し去る解釈です。

わたしはまなざしの輝き⁴で、至る所からあふれ出るニヒリズムに対する答えの仮説を試みました。

わたしたちは皆、その仮説を確かめるよう求められています。夏の間、何らかの方法で参加した行為の中で、ある人のまたは別の人の証言やその人たちの現実に対する態度から、わたしたちは日常生活の味わいか空虚か、存在の勝利か無の勝利かを見ることができました。わたしたち一人一人は、自分たちが見聞きしたすべてのことが無から引き離しながら自分のうちに何を生じさせたか、何を目覚めさせたか、何が自分をドキッとさせたか、逆に、何が自分に影響を及ぼさず以前の空虚のままに残したか確認することができたでしょう。あれやこれやと議論することはできますが、あれとこれの違いは明らかです。わたしたちの人生を変えることができるほどのものに遭遇した時(生まれながらの盲人の人生を変えたように)には、(あれとこれは)比喩物になりません。

今年の夏、わたしたちには並外れた証言が与えられました。そこに表れている自己意識と、しばしば気づかれにくい歩みの自覚とが並外れています。それは、リミニのミーティングの際にフェルナンド・デ・アロにインタビューをされたミケル・アズルメンディの証言です。それを耳にして以来、わたしは皆さんと一緒に再度見たい、皆さんに勧めたい、皆さんと分かち合いたいと思いました。年度始めの日ほど適した機会があるでしょうか。

皆さんの中にはすでに見た人もいますが、このインタビューでまず印象的なのは、アズルメンディが病院のベッドで夜明けに見知らぬジャーナリストのラジオ番組を聞いたという些細な事実、非常に特殊な偶発事に遭遇して以来の歩みを語る飾り気のなさです。偉大な社会学者である70歳を過ぎた人の、まもなく彼自身が語るのを聞きますが、その後のプロセスの発端となった最初の反動の誠実な受け入れ方が感動的です。ニヒリズムが横行しているこの時代に、それが起こった時に特異な経験だということに気づき、ニヒリズムではないものを見分け、単にその違いの最初のかすかな明白な事実に従うことによって、ニヒリズムを打ち負かすことができたことに驚く様子を描いているように思えます

⁴ J. Carrón, *Il brillio degli occhi. Che cosa ci strappa dal nulla?*, Editrice Nuovo Mondo, Milano 2020.

。小さな亀裂がダムを崩壊させるのに十分だったのです。

予想外でした。アズルメンディは《自分の人生でこのことに出会うなどまったく予想外だった。とても驚いた。まったく並外れたものだった。驚いて、これは聴く価値があると思ひ、徐々に称賛モードに入った。[…] 称賛は、自分をもっとも大切に思っているものに自分を重ねる動きだよ。なぜなら、期待していなかったから》と説明します。

年度始めの日のタイトル《人には称賛するもののみ見える》に要約されているように、アズルメンディの歩みを導いたのは称賛でした。ラジオで話す見知らぬジャーナリストと、その後出会った多くの人々に対する称賛に従うことによって、彼は、観察者の中立性一知するためには尊重されるべき—に反するため研究対象と交わってはいけないという社会学の原則に疑問を持ち始めたのです。アズルメンディは、教授としての仕事で蓄積されたすべてのフィルター、すべての目隠し(馬の)を徐々に取り除かなければなりません。《“手の届く所にあったのに、なぜ僕はそれを見なかったのか?これは説明を要する”とつぶやいた》。人には称賛するもののみ見える。見える一人が本当に気づき、見つめ、理解する一のは、心を打つもの(«*affici aliqua re*»), あなたを惹きつけ、とらえるものなのです。ある特定の出会いが起こる時にのみ目は開きます。

彼は見たものを説明するために、次の今月の本になる *抱擁* を書きました。《この本を書く際の問題は、目にしていたことが驚きと多くの感情を引き起こしたことを表したいというものだった。けれども、なぜ僕にそれが見えなかったかの理由も書きたかった》と。わたしたちがまもなく見るビデオと *抱擁* という本は、特定の出会いの前に彼に見えていなかったように、なぜ見えないのか、彼がイデオロギーの無に陥っていたように、なぜ無に陥るのかを理解するのに役立つ信頼できる証拠を示してくれます。

彼はその年齢と持っている歴史にかかわらず、《自分の驚きの原因と時間的なつながりを突き止め》、理解し、そして結果を引き出すために見て回る(学校を始めボランティア活動、家族、CLの兄弟会の小グループ)ことに *開か* れていました。こうして彼は自分の目の前にあったのに見えていなかったものに気づいたのです。

《このように生きることを望んでいたこの美しい人生、この人々のライフスタイル、献身と喜びに成されたライフスタイルはどうすれば得られるのか》とアズルメンディは自問します。そして、《人にはひらめきがあるかもしれない。ひらめきのようなものがある人目を引くすばらしい人々はいても、その後衰える》と付け加えます。ですから、《この事実に対する説明は一つだけ。彼らが君に言うことが真実であり、真実はまことに行動するものだということだ。[…]真実はいのちを生み出す。このライフスタイルは何かによって生み出されているんだ。彼らはそれがイエス・キリストだと言う。[…]この人々が「彼」に従っているということだ。だから2+2を計算して、“これを信じるべきだ。これは僕が信じる生きたイエスだ”と言える。神を信じることはなかったと思う。[…] “どうして彼らは皆が同時に間違えることができるのだろうか?”と問うことを強いられる時がある。敵も知ってい

⁵ M. Azurmendi, *L'Abbraccio*. Verso una cultura dell'incontro, Bur, Milano 2020. 逐語訳

たんだ…彼を知らなかったけど。ヨハネとアンデレは「彼」について行っていたけれど、「彼」を知らなかった」と結論付けています。

では、一緒に見て聞きましょう。

抱擁

BUR Rizzoli 社の L'Abbraccio (抱擁)出版に際して
2020 年のスペシャル Meeting のために
フェルナンド・デ・アロが行った
ミケル・アズルメンディへのインタビューのビデオ

<https://www.youtube.com/watch?v=l22ftPR7tc0&feature=youtu.be>

フェルナンド・デ・アロ。アズルメンディ、ミケル！

ミケル・アズルメンディ。フェルナンド、元気？

－久しぶり、久しぶり、やっと会えた！

－どうしているんだい？抱擁もだめ、いつものようにはいかないね。

－抱擁はこれだよ。抱擁はできないから。

－元気？

－ここに來られて嬉しいよ。とても手入れが行き届いているね。

－仕事だよ、仕事は大切。

－これは畑だね。

－家の近くに小さいのが。ほかに、トマトを植えているのがあるよ。見たいなら、午後から行ってみよう。道路の向こう側だから。

－抱擁について話そうか？

－そうしよう。

－最初の方のページについて話そう…この本の最初の方のページは、読むより聞いた方がいいかもしれない。

－そうだね、聞いた方がいいね…

[フェルナンド・デ・アロは携帯に録音していた自分のラジオ番組の一部を聞かせる:]

－仕上げるために見開きのページの写真を選ぶよ。

－コペ（番組の名前）から、記者のフェルナンド・デ・アロです。朝の 6:30 から 8:20 まで、今は終了少し前です。[録音は続く]《…壁の前に黒いジャンパーを着た有色人種の女性が。彼女の名前はリタ、手で顔を覆って…》

－これを聞いた時はどこにいたの？

－キッチンに。朝は 6:00 か 6:30 に起きて、週末はこの新聞記者の番組を聞いていた。後になってフェルナンド・デ・アロという名前だと知ったけれど、誰なのかは知らなかった。

－当時はまだ知り合ってなかったね。

－知り合ってなかった。僕は病院で君の番組を聴いていた。入院していた…

－どうして入院していたの？

ー6年前、2014年に遡る長い話だよ。関節炎を患って…だから、この仕事をしている…力を失わないように…そして注射を勧められて、6本。4本目を打った時に崩れ落ちた。この注射は打つ前に毎回肺の状態をチェックする必要があるらしいけれど、僕はもう4本打っていた。歩くことができなくなって、ここまで来ることもできなかった…7月7日のことで、病院に行って死のうと決めた。息子に（今はここにいないけれど、その時はいたので）“病院に連れて行ってくれ。そこで死ぬから”と言って、状況を説明し、“誰にも何の借りもない。家も払い終えている”と伝えた。病院では四日連続で、その夜を超えられるかどうかわからないと言われたそうだ。けれども、僕は乗り越えた。死にたくて、死ぬために努力した。病院ではこの携帯電話を持っていたよ、見せてあげよう…ある土曜日の朝、君の番組を聴いた。あまり眠れなかった。今はもう少し眠れるようになったけれど。聴いて、これは興味深いとつぶやいた。それから毎週土日、2014年から2017年毎週土日には聴いた。君の考え方を完璧に知っているよ。現実についてどう考えているか、現実に関するニュースについてどう考えているか、現実に関するニュースを伝える自分自身についてどう考えているかを知っている。3つの大切な側面だ。これら全部に関心があったので、ずっと聴いていた。小さなラジオがあった台所で聴いていた。

ー一本は僕がコメントしていた画像で始まっているね…

ーそのように始めた…

ーそのために君は本をこのように始めた…

ーこのように始めたけれど、ある方法で始めるとなぜそうしたのかはわからなくなる…もしかしたら、そうだったのかもしれない。どちらにしても、本の草稿を始めるのには苦労したよ。1年半かけてメモを取り、そしてこのように特別な種族について本を書く決心をした。自分の人生でこのことに会うなどまったく予想外だった。とても驚いた。まったく並外れたものだった。驚いて、これは聴く価値があると思い、徐々に称賛モードに入った。

ー称賛モードを説明してもらう前にもう一つの畑を見せてくれる？

ー見に行こう。

ー何か、あるいは誰か、あるいは一冊の本…を見つけて人が驚くという、驚くべき事実…それが自分にとって興味深いと気づいた時、称賛になるんだ。称賛は、自分がもっとも大切に思っているものに自分を重ねる動きだよ。なぜなら、期待していなかったから。予想外だ。これについての著書は数千とある。称賛は、見つけたものに同意させるもの。自分もそうありたい、そのものになりたいと思うからだ。

ーこの本の驚くべきことは、君が、以前から社会学者、人類学者であり、素晴らしい研究をしてきたこと…

ーそうだね。

ーエル・エヒド、移民等々…覚えている。ここでは、方法を変更している。社会学の原則は、研究する対象と交わってはいけないということだ。けれども、君は、ある時点で、おそらく称賛のため、観察者の中立性に反している。

ーその通り。デュルケームとウェーバーの社会学では、人間に関しては科学的な立場で可能な限り、定量化し、客観視しなければならないと言う。最大値は定量化。そう、そのためだけに統計が大きく発達する理由だ。信じていること…デュルケームや他の人々が共有する信念、人間を説明することは鉱物を説明することと同じことであり、人間の事実は世界や社会的事実と同じカテゴリーであるという信念から来るもの。僕は啞然とした表情の前で、起こっているものに限定して説明することにした。他の人々は起こっていることを見ようとしな。僕は《手の届く所にあったのに、なぜ僕はそれを見なかったのか?これは説明を要する》とつぶやいた。すべての社会学者は、毎日自分の目の前にあったのに見なかったものを、なぜある時点で見たかを説明する必要がある。称賛する時にのみ、そこに君にとって何か良いものがあると思う時にそれを見ることができる。人間が見る時には、常に興味があり、それは社会学者も同じ。社会学者は、自分が見たいものを見るために見る。この本、*抱擁*で僕がしようと決めたのは、自分の驚きの原因と時間的なつながりを突き止めること。サウロの落馬同様、爆発のようだったので、君と始めた。馬からの落下、または貧しい人にマントを与える聖マルティン…あることに耳を傾けると言う“落馬”がある。それは人が仲介しない君との出会いで、君の声で…それは一冊の本でも、何でもいい。僕は《いいと思う。僕も起こることを前にしてこの見解を持ちたい。なぜ僕にはないんだ?》と考えた。

ー比較し始めるんだね。

ー《なぜ僕はこの見解を持っていないんだ?》と自問し、そこから自分を再構成し、どの視点から君を見て、君の話に耳を傾けるか、自分の自己の境界を識別し始める。社会学者は決してしないよ。社会学者は、午前中は白、午後は黒、明朝は黄色、午後からは赤。変わる。僕たちの大統領を見て…

ー本の中でもう一つ心を打つものがあるよ。ある種の慣性を断つから。この本には名前が一杯出てくる。最初に僕、次にハビエル・プラデス、次にマカリオ。これらは特定の話で、君はそこから知識を得ている。

ー出会い、出会いだよ…

ーけれども、啓蒙思想は逆を言っている。つまり、知識に至るためには普遍性に向かう必要があると言うのに、君は個に向かっている。

ーなぜ普遍性に向かわなければならないの?! 普遍性というのは、フィクション。普遍性はどこにもないよ。存在しない。君はこれまでの経験から仮説を立てることができる。けれども、それらはイメージだよ。僕は自分の驚きの原因と時間的なつながりを突き止めたかったんだ。僕の次の驚きの対象はプラデスだった。プラデスは、移民と多文化主義に関する座談会で2002年にマドリードで出会い、それ以来8年間毎年クリスマスカードを送ってくれた人だ。彼はカードを書いてくれたが、僕は一度も返信しなかった。一度も! 病気の後、自分にまだできる善行をしよう [と決め]、僕が最初にしたのは彼に《8年間君の手紙を無視して、答えたことがないことを赦して欲しい》と手紙を書いたことだ。彼はサン・セバ

スティアンに用事があるので、よければ会いましょうと答えてくれた。些細なことのように思えるが、僕たちは啓蒙思想について話し合った。僕たちは、それぞれ異なる角度、彼は知識の側から、僕は倫理から出発していたけれど、共通の視点を持っていた。僕は人類学に移行するまで、大学で長年倫理学を教えていた。プラデスには、人の言うことに耳を傾け、問いかける人を見出した…人を驚かせ、そして自分も驚く人だ。彼は自分と話したいと言う人に驚き、見つめられることに驚く。このことは人をさらに驚かせる。彼は人に入り込んで、落ち着かせるまなざしをしている。マドリードで開かれるある集いに招待されたけれど、僕は妻のイレネに《僕は行かない》と言った。すると彼女に《でも、あなたは彼に行くと言ったでしょう》と言われた。事実、僕は行くと言っていた…特別な方法で僕を見つめ、僕を理解し、僕の話聞いてくれるあの人と和解したかった。だから、僕はエンカウンター・マドリードに行った。出向いて行くために僕は自分自身に打ち勝たなければならなかった。キリスト信者と僕は何の関係があるのか、と。

—そこに行って、これはまるでパリで見たヒューマン・フェスタのようだったんだね。
—そう。Fête de l'humain、ヒューマン・フェスタを思い出した。僕は9年間パリで暮らし、その前は工場で一年間働いた。僕は自分自身をマルクス主義者だと思っていたので、1970年のヒューマン・フェスタに参加した。共産党に入ったことはないけれど、それに近かった。ブルゴス裁判の年であり、スペインとフランスの共産党はヨーロッパ全土に広がっていた。僕はスイスとベルギーで共産党主催の集まりに出席した。そこで僕は共産主義が何であるかを知ったけれど、好意を持ったことはないんだ。そして、エンカウンター・マドリードでは、ヒューマン・フェスタではなく、僕は人間そのものに出会った。僕は人間的な人々、笑顔で、静かに行き来する人々に会った。彼らはお互いに挨拶し、抱擁し合い、人に耳を傾け、質問してきた。走り回る子供たち…笑顔、喜び。僕はびっくりした。あのようなのは想像もしなかったことだった。

—エンカウンター・マドリードで啓蒙思想に対する君の批判を聞き始めた時、僕は心を打たれた。《近代と現代のすべての哲学を把握しているこの人は、スペインでは誰も知らない啓蒙主義の批判した》と考えた。

—それは僕がプラデスと話したことで、彼に《自分の考えは言うべき！》と言われたんだよ。

…

—これはオンダレタ・ビーチで、ラコンチャ・ビーチの一部だ。この二つのビーチはピコ・デ・オロと呼ばれる岬で分断され、あそこにファン・カルロス王が生まれ住んでいた宮殿があった。これはサン・セバスティアンの最初の集落。11世紀にはこれしかなかった。それと修道院があった。

—オンダレタは君の出身地？

—僕の出身地だよ。僕はもう少し上の方のクエスタ・デ・イゲルドで生まれた。僕の父は

ここに炭焼き窯を持っていた。ここはオンダレタの刑務所だった。

—君は神学校に入って、22歳で追い出されたのかい？それとも自主退学したのかい？

—21歳の時に追い出された。5人と、一人自発的についてきて、6人追放された。何の説明もなく追放されたので、僕は理由を訊ねに行ったんだ。理由は何だったと思う？

—どうして？

—《君はすべての祭司がバスク語を知らなければならないと言った》と言われた。僕は認めて、さらに《言っていないにしても、僕はそう思います》と答えた。これが理由。

—その時の君にとってキリスト教は何だったんだい？何か概念的なもの、教義、信心？

—神話と教義の間の何かだね。秘跡の方は神話的であり、後はすべてがルールと告白、それ以外は何もなかったよ。僕の関心の的は正義だった。正義とは何か？なぜ正義がないのか？ フランコの時代、1962年か63年だった。

—君は僕が生まれた1965年にETA（バスク祖国と自由）に入ったんだね。

—そう、その前に工場で2年間働いた。神学校から追放された時、僕がしたかったのは、君たちが《仮説の確認》と呼ぶものだった。そして、実行したよ。僕の仮説は、社会正義が必要で、僕たちが置かれていた政権下では不可能だという考えだった。僕は仕事の世界で、他の政権でそれがどのようなものかを見たいと思った。ドイツとパリに行き、ウッチンソンで働いた。そして、パリで信じられないことが起こったんだ。僕はETAに所属する異常な人に出会った(3人に出会ったけど、1人は異常だった)。彼は強盗をした後、フランスに逃げていたが、戻ることを決意したんだ。彼にホーチミン、トランチン、チェ・ゲバラ…を読ませられた。僕はあの男に魅了されていたよ。驚くべき出会いだった。僕は勉強するためにパリに行き、学長と話し、何の問題もなかったので入学の手続きをするところだった。まさにその時、ETAの友人は僕にスペインに戻って勉強することを勧めたんだ。僕は彼らの考え方に共感し始めていた…

—そして、有名な投票…フレン・マダリアガは君のボスだったの？

—ここに戻ってきたら、ETAの頭、パッティ・イトゥリオスは、労働組合の支部を立ち上げるために僕をバサヘスへ送った。僕は荷揚げ作業員として夏の間ずっと働いた。パッティ・イトゥリオスと少し親しくなった。そして、その年、1966年の秋、外からやって来たフレン・マダリアガは、サン・セバスティアンの僕たち全員を集め、パッティ・イトゥリオスはその夜暗殺されるべきだと言ったんだ。投票することにして、マダリアガは2票を保持した。彼は銃をテーブルの上に置き、《今夜、彼を殺さなければならない》と言った。僕たちは皆、胸がふさがる思いだった。投票し、1票の差で反対が決まった。

—この出来事は君に跡を残すことに…

—一生消えない跡を残したよ。組織に入った途端、最初に要求されたのが人を殺すために投票することだったんだから。周りを見渡して見たのは、僕のような人ではなく、いくじのない人々だった。人を殺すために投票するのは残酷だよ。自分は何者？自分自身に立ち向かうことを強いられる。何かしっくりこない。僕はETAから逃げなかったけれど、持

ちこたえられなかった。僕は第1部の第5回目の集会には行かなかった。けれども、リーダーだった僕の友人が《来なければいけない、来るべきだ》と言うので、第二部となる第6目の集会に出席し、小さな役割り当てられたんだ。それは経済学部在籍していた僕を勉学から遠ざけた。そしてETAに入会した。1967年のキリストの聖体の祝日に僕たちがある商店への強盗を計画し、ガラスを突き破って店に侵入しようとした時、警察がやって来て僕は撃たれた。2メートルの距離からだったので、僕は殺されてもおかしくなかった。僕は山に逃げ、3週間そこにいた。1969年に僕たちはETAの修正を図るいくつかのグループを結成し、ETAは武器を捨て、殺すのを止めようと提案した。1968年にはとても辛いことが起こったから。僕が脱出したので、僕のポストに就いた仲間と、そして僕がETAに紹介した仲間、この二人が最初の警察のホセ・パルディネスを殺害したんだ。それは1968年のことで僕はパリにいたけれど、死者に自分を重ねながらすべてを見ていた。エステバレタは銃を引き抜き、警察に撃たれて死んだんだ。僕は《あれは僕がやるべきだった》と考えた。実際に自分自身は殺人者と思えるんだ。

—君にとってあの時期はどういう意味を持っているんだい？数年後、ここサン・セバスティアンの中心部のレストランでETAはグレゴリオ・オールドニェスを殺害したので。

—30年経った1995年のことだった。僕は一君にオールドニェスの件を説明するために一学生たちと一緒に個人的なレベルでETAと戦っていたけれど、政治的、公的には絶対戦わなかった。人民党でもっとも投票されたオールドニェス、サン・セバスティアンの市長になるはずだった彼が殺された時、僕は公の場であることをした。バスク地方の大学で開かれた最初で最後の集会を呼びかけたんだ。オールドニェスの暗殺の翌日に行った集会以外の集会は開かれたことがない。サヴァテルがこの話しを知っている。彼の妻が僕たちと一緒にそこにいたから。教授5人でやったんだが、その後数週間のうちに全員が脅迫された。死んだ動物のはらわたを送りつけられたよ。

...

—エドゥアルド・チリダのペイネス・デ・ロス・ヴィエントス。チリダはそこに住んでいる。とても美しい文がある。西、東、風はそこから入ってくる。僕たちはそれを《ガレゴ風》と呼んでいる。チリダは、風はサンセバスチャンにくまなく入るべきだと言う。見て、あそこがサンセバスチャン。部分は全体の中でだけ意味をなす。櫛、ほうき、あるいはブラシ、それらは小さな部分の総体、人間のように全体でしか意味をなさないものだ。

...

—卵を割って…

—君のためにタラのオムレツを作ろう。玉ねぎとタラは準備したよ。

—タラはもう塩抜きしてあるのかい？

—タラはまず塩抜きして、次に玉ねぎを加え、それから僕はコショウを少し入れるよ。違

うやり方をする人もいるけど、見ていて。完璧な申し分のないオムレツが食べられるだろう。

一本に戻ろう。教育に長く携わった君が、コムニオーネ・エ・リベラツィオーネの学校をいくつも訪ずれ、教育の方法に感銘を受けたと言っている。何が君の注意を引いたのかな？

—教育…僕たちは教師だった。最初の驚きは、CLの教師が自分自身を先生とは考えておらず、《先生》という言葉を使わないことだった。彼らにとって、ポイントは教育すること。教えることと教育には違いがある。教えることはロボットにもできる。教育するというのは、生徒を愛することで、僕は彼らがどのようにするのかを見た。彼らが行うすべてのことに注がれる愛、情熱、熱意を見た。僕はコルベ校で、いやニューマン校かな、おそらくニューマン校の短い廊下で《君は贈り物です》と書いてあるのを目にした。話すことを学んでいる子供に、書くことを教える前に、教師たちは彼が贈り物だと教えるんだよ。これが何を意味するかわかるかい？自分が贈り物で、そして同じように贈り物である他の子どもがいて、その贈り物を自分たちに与える人がいることを子どもに教えているんだ。これは彼ら（教育者）にとって重要なことだ。子どもたちは…このようにして、君は子どもに現実が何であるかを説明することができ…現実への最初の導入、子どもたちの世界での最初の一步で…自分たちが贈り物の受取人であることをすでに知っているんだ。僕はあっけにとられた。

[オムレツの準備をしながら]

—塩はちょっとしか使わない。

—僕も、血圧が上がるので。

—血圧が上がって、注意 *atención* が下がる、とバスク語で言うんだよ。

—僕が心を打たれたもう一つのテーマは、無償の愛。君が薬物中毒者の世話をするボカタスの人々と一緒に大勢の薬物中毒者がいるカナダ・リアルに到着した時…僕はあそこにルポルターージュをしに行っていたことがある。彼らの多くは幽霊のようで、衝撃的だった。ぎよっとする…

—僕は2時間そこにいた。マカリオと一緒にいったんだ。彼は行ったことがなかったけれど、僕の頼みでついて来た。僕は彼に《帰ろう。これはばかげている。彼らはここで何をしている？誰を救っているんだ？》と言った。本の中で言っているけど、僕が持っている無償の愛の概念はマックス・ウェーバーのものだ。僕がよく知っている *経済学と社会* という本から取った一節に《無償の愛は人々への施しを拡大したものである》と。僕は、困窮している人に施しをすること、無償の愛はそういうものだと思っていた。そして、僕は若者たちに《君たちはこの人たちにレンズ豆を配ってどうするつもり？》と訊ねた。そこに黒人の男性が、立っているのも困難のようで杖をつきながら歩いてやってきて、そこにあった机からミルクを取ってリュックに入れ、ビスケットを一袋取って頭を下げたまま去って行った。若者たちは《僕たちは自分自身を空にするためにここにいる》と言う。多くのことを考

えさせられる。自分を空にすることが何を意味するのかを理解するために、よく話す必要がある。自分を空にするとは、どんなことを言われても黙っている覚悟ができていることを意味する。君は何かを得るためにそこにいる。自分を空にしなければ、何も得られない。自分の偏見を空にしなければならない。僕たち、僕たちは曖昧な偏見で一杯だった。《僕たちはここで何をしているのだろうか？》

—僕も同じことを考えたよ。

—これは偏見だが、僕たちは何も与えるべきではない。自分自身を空にするんだ。そこにいて、待つ、彼らは助けを必要としている。イエスはそうした。自分自身を空にするというのは、愛されることを覚悟することを意味する。誰かが君に何かを与えるのを、言葉をかけてくれるのを…カナダで成果が出ていることは知っている。回復した人がいると。

—けれども多くの場合、成果は出ない。

—成果は出ない。実際に、24年間で24人救ったそうだ。けれども、彼らは助けられた。自分を与えられたんだ。

—じゃあ、オムレツを焼こうか？

—さやえんどうを準備するよ、ここにウサギの肉がある。

—この鍋はさやえんどうのためだよ。

—君はフェランと一緒に複数の家族のグループと行動して。君はすでに教育、無償の愛に心を打たれ、それから思いがけなく、あの複数の家族の間に存在する一致に感動した。

—君は本を一章ずつたどっているようだね。僕たちが菜園にいた時、言いたかったけれど、言わなかったことは、この本を書く際の問題は、目にしていたことが驚きと多くの感情を引き起こしたことを表したいというものだった。けれども、なぜ僕にそれが見えなかったかの理由も書きたかった。僕は《称賛》と呼んだ驚きの感情の異なる瞬間をまとめなければならなかった。2年が過ぎたので、この称賛を時間の流れに沿って…

—そうだね、長い探求だから…

—原因もだけど。君は僕を驚かせたことについて訊ねるのだね。君の質問が理解されるように言うんだが、本を読んでいない人がいて、《なぜそんなことを訊ねるのだろうか》と思っているかもしれない。多くの人々がそこで会うのを見たよ。僕もその一人だった。マシアで最初に彼らから言われたことは、《あなたの人生について話してください。あなた自身について何か話してください》だった。グループセラピーかと思ったよ。グループセラピーではなかった。彼らにとって語るということの意味を理解した。彼らと話しながら、すぐに理解した。それはグループセラピーではなく、神のセラピーだった。何というセラピー！人生を説明するための最初のポイントは、君がアイデンティティを持っているということ。親指小僧（シャルル・ペローの童話）は自分のストーリーを語らず、他の人が語る。けれども、語るように依頼されたら、自分の人生を語るものだ。アイデンティティの問題だよ。幼児期から今日まで自分の物語を統一的に伝えることができるかどうか。社会学が示したように、サルトルの後の人が抱えているアイデンティティの大きな問題…

－アイデンティティの連続性を維持すること。

－自分が自分の主人であると信じていて、自分で好みを決めていると、自分の主人であって、常に自分が興味を持っていること、満足すること、望むことをしていると信じているからだ。そして、あるものから別のものに瞬間ごとに変わる。僕たちは皆、それをよく知っている。問題は、第一に僕たちの行動のすべての変化を一つの自己に結びつけるもの、行動のすべての違いが僕に関係していることだ。この”自己”は僕であり、僕は僕の主人であり、自分について、自分がやったことについて答えるんだ。そして第二に、僕は幼児期から青春、そして青春からこの瞬間までの遷移があっても、僕は同じだ。変わったから以前と同じでなくても、僕は僕なんだ。

－けれども、自己の連続性がある。

－連続性は、僕が自分の行動の変化の主人であるという事実にある。結局のところ、自己は行動だから。

－抽象的なものではない。

－あそこでそれははっきりと見た。彼らがしているから僕は見たんだ。君は彼らがしているから気づくんだ。彼らがするのは神がいるから。興味深いものだ。僕はそれを結婚にも見た。僕はあるカップルに《夫と妻である君たちの間に何があるの?》と訊ねた。彼らは《神がいます》と答えた。僕はあちこちで説明を求めた。そして、常に二つの人生を結び付けることができる要素は神だと認めた。

－君はなぜあの戦争の只中でヴィトゲンシュタインを思い出したの?君はヴィトゲンシュタインを深く研究して、本の中のある箇所彼の日記の一節《神がわたしを訪ねない限り》を引用している。なぜ戦いの最中にヴィトゲンシュタインを思い出したんだい?

－僕にとってヴィトゲンシュタインは20世紀のもっとも重要な4、5人の人物のうちの一人だった。師だった。彼にはすべてが備わっていた。彼は富も名声も捨て、教えるためにスイスの小さな村に行った並外れた人だった。彼の論文、彼の哲学的考察…僕はフリアン・カロンの *La bellezza disarmata* (無防備な美しさ) を3回、もしくはそれ以上読み、ヴィトゲンシュタインの日記の引用を見つけた。それは、わたしたちには贖い以上に望むものがあるだろうか!それはどこにある?彼は言う。しかし、わたしたちはここにいる。テーブルに座って、天窓からほんのわずかな光を受け、それを見つめる。それは自分が向かって行きたい無限のしるしだが、わたしは地上のものに集中し続ける。そして、神が来てわたしを照らさない限り、わたしはここに留まるという内容だ。僕はヴィトゲンシュタインが立ち向かわなかったことを理解した。僕は彼の日記をすぐに取り出した一家にあったので—そして、僕は不可知論者には、常に真実を発見する恐怖があると思った。彼は《そうかもしれないが、わたしにはわからない…光がわたしのところに来るがよい!》と言うのを好むのだ。僕にはヴィトゲンシュタインの(人生の)終わりについて、彼が今どこにいるかの判断はできない。僕は彼を称賛する。彼は自分が強情な不可知論者であることに気づかなかったのだと思う。彼には《自分が光に向かって上がったらどうなるだろうか。身を乗

り出さないのはなぜか》と考えることもできただろう。僕が望んだのはそうすることだったと思う。つまり、天窓に上がって見ること。そうして、僕は君たちを見たんだ!

ーじっとしてられないことに気づいたんだね。

ーもし僕がヴィトゲンシュタインと同じことをしていたら、リピーターでしかないだろう。僕は常に先に進もうとする。

ータラのオムレツはすばらしい!

ー次はもっとうまく作るよ!

ー抱擁でもっとも魅力的に思うところがあるんだ。それは、君が研究しているこの種族を前に、君はある時点で、君が見ていることの仮説を神による結果であるだけでなく、受肉した神による結果だと納得でき、可能だと判断するというものだ。君は、その人たちが集団ノイローゼにとりつかれているとか、自分たちの望みをより高めるために、あのよう振る舞うのだと言い切って終わりにしなかった。だから、本のある時点で君はその仮説は納得がゆくと主張している。どうやってそこにたどり着いたんだい?

ー君は間違いなく、僕がある種の計算をする最後のステップの 1 つのことに言及しているんだね。つまり、《このように生きることを望んでいたこの美しい人生、この人々のライフスタイル、献身と喜びに成されたライフスタイルはどうすれば得られるのか》ということに。人にはひらめきがあるかもしれない。ひらめきのようなものがある人目を引くすばらしい人々はいても、その後衰える。その反対の人生が見えたんだ。僕は 2 年間この人たちの生活を追ってきた。この人々(本の中では登場人物だが、人々だ)、家族、僕はこれが奇跡でないなら不可能であることを知っている。そして奇跡だ、これらの家族は。その人はもう一つの奇跡だ。奇跡は至る所にある。そして、これはとても神秘的だ。僕を《なぜこのライフスタイルなのだろう?》という問いに導いた。1、2 年の間ひらめきがあっても、人生を通してずっと…しかし、君の人生、その次に来る人生、このような人生は 2000 年前から存在する。キリスト信者は 2000 年間君たちが生きてるように、人類を美しくしながら、無償の愛、愛を开花させながら、生きてきたのだと思う。社会学者は興味がないので、それについて話さない。彼らは CL や、僕は知らないけれど存在しているキリスト信者について話さない。彼らが存在していることは信者会や兄弟会で出会ったから僕は知っている。すると、問いが生じる。ある人の人生を、一全人生ではなく一人生をある期間説明することはできるが、家族、人生、善を行う世代、善が肉となること…この事実に対する説明は一つだけ。彼らが君に言うことが真実であり、真実はまことに行動するものだということだ。真実は常に行動的だ。真実はいのちを生み出す。このライフスタイルは何かによって生み出されているんだ。彼らはそれがイエス・キリストだと言う。もし僕がその人生を必要とするなら、それが僕にとって称賛の対象であるなら、僕はこの人生を動かすエンジンに称賛のまなざしを向けなければならない。これがすべて。そして、そのエンジンが人間だったことを理解する。人となった神。理解できる唯一の方法。僕は宗教比較史の教授だった。次のことで終わりにしたい。僕たち皆が研究する神々は抽象的なものだ。イエスが

言った《互いを赦しなさい、互いに愛しなさい、病人を訪問し、空腹の人に食べ物を与えなさい、人は自分よりも大切であり、いのちはそれを保つためではなく与えるために与えられているのだ。それを保とうとするなら、あなたはそれを失う》ということを行った人は一人もいない。人類全体にいない、一少なくとも僕は出会ったことがない。何百冊の本を読んだので僕が宗教を知らないとは誰にも言えない—こんなことを言った人は。イエスが言ったというだけでなく、この人々が彼に従っているということだ。だから2+2を計算して、《これを信じるべきだ。これは僕が信じる生きたイエスだ》と言える。神を信じることはなかったと思う。

—なぜ？

—神は概念だから。まず哲学、それから宗教と神学は、神を概念に矮小化する罠に陥った。これが相違だ。僕たちは神について話していない。僕たちは、僕たちが行くべきところを教えてくれる神であった人について話している。

—君が僕たちに《イエスが復活したというのが真実だったら？》と言った日を覚えているよ。君はあの証言の真実性と戦っていたね。

—《どうして彼らは皆が同時に間違えることができるのだろうか？》と問うことを強られる時がある。敵も知っていたんだ。彼を知らなかった。ヨハネとアンデレは彼について行っていたけれど、彼を知らなかった。《主だ》。彼らは主と2、3年間一緒に過ごす。どんなに変えられたことか、後になって！それが復活だ。僕たちは復活があることを知っている。彼は復活し、僕たちがよみがえると言ったんだ。

—ミケル、*抱擁*を書いてくれてありがとう。この会話の機会に、そしてここ数年間推敲してきたことに感謝するよ。

—僕の方が君たちに感謝しなければならないよ。この4、5、6年間、放送し続けてくれてありがとう。ひらめきだったよ。フェルナンド、僕が君に感謝しなければならないんだよ。あの放送が僕たちをここに導いたんだ。感謝してもしきれないよ。

—僕にとって君と出会って、学んだことがどれほど価値のあることか、感謝してもしきれない。ありがとう、ミケル。

結論

フリアン・カロン

わたしたち一人一人は、アズルメンディのように、まず自分の目の前で起こること、今起こっていることを見るように招かれています。それが第一にわたしたちそれぞれのために、持つべき自分への愛情のために決定的だとわたしが感じるのはなぜでしょうか。起こっていることを見ないなら、起こるキリストの出来事を見ないなら、それに従わないなら、前に進むこともできず、当然他の人の歩みに貢献することもできないからです。人生・いのちがかかっている今起こっている出来事に配慮することです。他のすべてのことには、それを変える力はありません。出来事を説明や解釈、教義に置き換えることはできません。それは無を増進させるだけです！結局のところ、多くの議論の背後にあるのは無です。それはわたしたちを変えないばかりではなく、最終的にはうんざりさせるという事実から見受けられます。けれども、どんな議論も今年の夏に多くの人々に起こるのを見たことを取り消すことはできません。

アズルメンディに見たように、また生まれつきの盲人が癒されるのを目の当たりにしたすべての人に見られるように、まさに事実の前でわたしたちは自分の心がどれだけ開き、どれだけ心を動かされることに開いているかを確認するのです。なぜなら、起こる出来事ほど、わたしたちのニヒリズム、わたしたちの無を挑発するものはないからです。《新しく、異なった、より本物で完遂された望ましい人間性は、唯一わたしたちの人間としての、現代人としての意識をほぐすことができ》ます。それは、《魅了し、開放を与えるように感じられる“勧め”》⁶である唯一の事実です。このようにしてのみ、あなたやわたしの歴史の中で今起こる出来事としてのみ、キリストは現在における希望として、現在に打ち勝ち、未来を希望で満たすものなり得るのです。

今年の夏、多くの証言の中でそれを認めることができました。パレスチナのキリスト教徒の女性がイタリアから到着した運動の巡礼者のグループに何を見たのでしょうか。夏の責任者の集まりで語ってくれたように、パレスチナに生まれたことは、彼女にとっても子どもたちにとっても罰のように感じ、何年も逃げ出したいと思っていたにもかかわらず、自分の土地にとどまることを決めるに何を見たのでしょうか。彼女は自分の判断、すべてに対するまなざしを変えた出会いをしたのです。また、重病を患っているわたしたちの運動の仲間のシャオ・ピンはどんな経験をして、台北の《共同体の生き生きとした中心》になったのでしょうか。《最近、今の自分の使命は、訪れる痛みや死に立ち向かうことを学ぶのではなく、残された時間を自分が出会ったもののことを皆に伝えるために使うことだと理解しました》⁷

⁶ J. Carrón, まなざしの輝き. 何がわたしたちを無から引き離すのか? 4章脚注 173 参照 逐語訳

⁷ *Tracce* 2020年9号に掲載された《手紙》逐語訳

と言えるほどの。彼女は目下の大切な緊急課題を理解したのです。

あなた方のうちの一人が《水曜日の「朝の祈り」で“あなた方は恐れを抱く奴隷の霊を受けていない。主の霊があるところには、自由がある”と読んで感動しました。つまり、恐怖から解放され、自由である経験を生きる人々の中には、わたしたちを無から救う“まなざしの輝き”を見ることができるとでしょう》と書いてきましたが、それはベツレヘムと台北の2人の友人の経験です。

人がどんな顔をしていようと、どんな特徴があろうと、最後に加わった人であろうと、《権威とは、その人を見ることによって、キリストの言うことが心に一致するのだと、理解させる者のことである》と、去年の「年度始めの日」でドン・ジュッサーニは言っていますが、覚えていますか。つまり、キリストが本物で勝利することを見せるのです。さらにおしゃべりや議論、または役割によってではなく、《このことによって民は導かれるのである》⁸と加えています。

ポリートは、最近発生した若者の爆発的な暴力事件について、真の緊急事態は教育に関する緊急事態であることを一般信徒として同じことを述べています。何がこうした事態に答えることができるのでしょうか。《人格の形成過程にある一人ひとりの心と頭の疼きに触れることができる“師”》だけだと言い、さらに《人生でそういう“師”に一度遭遇した人々は幸いだ》⁹と述べています。

疼きに触れる！そよぎであることもあり得るのです。ドン・ジュッサーニは《主は一陣の風のように働くこともあるので[...]そよぎのように[...]一瞬の間、人は魅力を感じ、何かより美しく、より心に一致する、より良いものを直感する》¹⁰と言います。それは、アズルメンディが言っていたように、人に称賛を呼び起こすものです。そこに、その瞬間に、ニヒリズムとの戦いのすべてがかかるのです。その“そよぎ”をキャッチし、従う心の開きに。ですから、すべてはわたしたちのモラル、わたしたちの心の開き、つまり、わたしたちの真実に対する愛によるのです。

従って、これまで見てきたように、歩みの最初の条件は、見ることです。ジュッサーニは1994年に《福音書には500回以上“見る”という動詞が使用され、“信じる”、“愛する”、“従う”はわずか150~180回である》¹¹ことを強調していました。

見る。《それがすべて?!》人によってはわたしたちに押し寄せるすべての挑発を前に、物足りないと感じられるかもしれません。けれども、本物の人間らしい歩みの決定的な条件として、わたしたちに常にそれを勧めてきたドン・ジュッサーニにとってはそうではありませんでした。運動に長くいる人は、マルセリーノの顔があった1992年の有名な復活のポ

⁸ 2019年 年度始めの日「この方はどなたなのだろう？」参照

⁹ A. Polito, «La violenza nichilista tra i giovani», op. cit. 逐語訳

¹⁰ L. Giussani-S. Alberto-J. Prades, *Generare tracce nella storia del mondo*, Bur, Milano 2019, p. 116. 逐語訳

¹¹ L. Giussani, *Il tempo si fa breve*, Esercizi della Fraternità di Comunione e Liberazione. Appunti dalle meditazioni, Cooperativa Editoriale Nuovo Mondo, Milano 1994, p. 24. 逐語訳

スターで、《仲間は[…]とりわけあなたに“見なさい”と言う。なぜなら、同じ召命を持つすべての仲間の間には、常に見るべき人、あるいは見るべきその人の瞬間があるからだ。仲間の中では、人を見ることがもっとも大事なことだ》¹²と読んだことを覚えているでしょう。

1980年のジョヴァンニ・テストーリとの対話の中で、ジュッサーニは《存在感のあるこのような人々が増えること以外に希望の兆しを見出すことはできない。このような人々が増えること、そして彼らの間の必然的な好意が（希望の兆し）だ》¹³と述べていました。

2つ目の条件は、認めることです。それは、見ることにすでに暗示されているものの開花です。何かの中の何かを認めること、スペインの運動の人々との3年間の交わりの後にわたしたちの友人のミケルがしたように。けれども、認めるためには根本的な誠実さが必要です。この日曜日に朗読される福音書に出てくる二人の息子のたとえ話でイエスの苦々しい証明がわたしたちにも当てはまらないでほしいなら。御父のみ旨を成し遂げたのは誰ですか。御父のみ旨が表されていた事実を認めた者です!《イエスは言われた。「[…]徴税人や娼婦たちの方が、あなたたちより先に神の国に入るだろう。なぜなら、ヨハネが来て義の道を示したのに、あなたたちは彼を信ぜず、徴税人や娼婦たちは信じたからだ。あなたたちはそれを見ても、後で考え直して彼を信じようとしなかった》¹⁴と福音書は述べています。

イエスにとっては、起こることを認める心の開きにすべてがかかっているのです。しかし、なぜそうした心の開き、誠実さが必要なのでしょうか。それは《「神秘」、運命は、ある肉体を通して、時間と空間の現実を通して、物事の物理的なかたちに従って、特定の状況を通して伝わる。それらの状況は、フェリサイ派の人々の目には、キリストやその家族、彼が行ったことや話していたことが、すべて脆弱で無意味に見えていたように、ありのままの弱さを持ち続ける。この方法を認めることを信仰と言う。それは、ある特定の外観において偉大な存在を認める人間の知性を指すからである。自然に特定される外観（状況）のうちに、根源の偉大な存在[ミケルの証言で見たように]、運命の究極の実質(“すべては「彼」によって成っている”)を認めることである。[…]わたしにとって身近な特定の状況にならないなら、「教会」の偉大な神秘は無駄なものになり、自分の解釈、感情、気まぐれ、自己主張にまかせてしまう》¹⁵からです。

キリストは今日、一人ひとりの、あなたやわたしの人間性の扉をどのように叩くのでしょうか。

《今—今!—この瞬間に、わたしたち一人一人が、典礼にあるように、“生きた石として”築くその体の中、「教会」の神秘の中で、存在として具体化しないなら、アンデレとヨハネのイエスでさえ何と抽象的なものになるだろう。[…]しかし、もう一度問うてみよう。

¹² «Volantone di Pasqua, 1994, Comunione e Liberazione», in L. Giussani, *In cammino*. 1992-1998, Bur, Milano 2014, p. 366. 逐語訳

¹³ L. Giussani - G. Testori, *Il senso della nascita*, Bur, Milano 2013, p. 116. 逐語訳

¹⁴ マタイ 21,31-32.

¹⁵ L. Giussani, *La familiarità con Cristo*, San Paolo, Cinisello Balsamo (Mi) 2008, pp. 108-109. 逐語訳

この神秘的なキリストの「体」（“神秘的”なのは、その奥深いかたちはわたしたちの想像力を超えるから）、キリスト自身の体である—「彼」が聖パウロに“サウロ、サウロ、なぜ「わたし」を迫害するのか”と言ったように。サウロはキリスト信者を迫害していたが、キリストには会ったことがなかった。にもかかわらず、キリストの声は“サウロ、サウロ、なぜ「わたし」を迫害するのか”と言ったのである—この生きた「教会」はどのようにして伝わるのだろうか、どのようにして、キリストの神秘は伝わるのか、あるいは、黙示録の表現を用いるなら、信仰に招かれた一人ひとりの“扉を叩く”のだろうか。[…]教会の生活の中で！》です。ドン・ジュッサーニは《しかし、ある人が他の人々とは違う様相の人—キリストの神秘と「教会」に帰属することによって物事の見方、感じ方、触れ方、物や人との関わり方が変えられた—に出会うと、キリストに出会った時のヨハネやアンデレと同じように、開いた口が塞がらないまま見とれるのである。それは興味深い特別な機会である。聖霊は、自由に人々に触れ、その人がキリスト教的に考えることを容易にし、キリスト教的に感じることを喜び、寛大にキリスト教的に建設するよう働く。このような人に近づくすべての人々は何らかの形で心を打たれるのである。これだ！歴史上にキリストが留まることによってわたしたちが心を打たれる極端な方法は、聖霊、キリストの霊が、ある人に従うことによって信仰がより容易に明確になる人に出会わせることである。わたしたちの信仰への愛着がより強くなり、キリストの国をより意識的に、より創造的に広めたいという願望を生じさせる。これをカリスマと言う。つまり、カリスマの出来事である》と続けます。

16

わたしたちは、《カリスマの出来事》によってここにいるのです。アズルメンディやベツレヘムと台北の友人、ここでは触れていない多くの人々、そして皆が自分で見ることのできる人々に証しされているように、《今日》《生きている》出来事のために、わたしたちはここにあります。これが《昨日》だったら、それはもはや出来事ではなく、わたしたちを惹きつけ、変える力は持ちません。なぜなら、《"今"以外には何もないからだ！わたしたちの自己は、同時に存在するもの以外には動かされることも、心を打たれ、つまり、変えられることはできない》¹⁷からです。もしこの出来事が今日起らなければ、生きたものでなければ、わたしたちの手の中に教義のみ、並外れた教義であっても、教義にでしかないものしか残らないのです。どんな教義も、わたしたちの魂を《蝕む》ニヒリズムを克服することはできません。

《親愛なるフリアン、わたしは最近よく、ジュッサーニのカリスマは生きたカリスマなのか、死んだ教義なのかと自問しています。後者であるなら、わたしたちもヘーゲルの死後に起こったような状況に置かれます。つまり、“古い”ヘーゲリアンと“若い”ヘーゲリアンの議論、解釈の駆け引きしか残りません。わたしは運動に47年、メモレス会に40年間います。未だにドン・ジュッサーニの感動的な理性の用い方によって、テロの落とし穴やニ

¹⁶ L. Giussani, *Il tempo si fa breve*, op. cit., pp. 35-36. 逐語訳

¹⁷ L. Giussani, «Volantone di Pasqua, 2011, Comunione e Liberazione», clonline.org 逐語訳

ヒリズムの不明瞭な魅力から何度も救われたことを思い出すと心が高鳴ります。そして今、あなたがわたしの無への傾きをいのちへの望みに変える時、わたしやこの世の中で絶望している哀れな人々の人生・いのちに対する愛情で、“バーを引き上げ”、忘れられ傷ついた心に触れ、自己となるよう呼び掛ける時に心は同じように高鳴ります。キリスト教は、18歳の若者たちが明らかな理由もなく自殺する(わたしの大切な生徒に起こったように)この文化の中で、理論ですか。それとも今日においても父親の愛の出現ですか。わたしには70歳近い姉がいて、30年以上前に夫に捨てられ、子どももいなく、癌と闘い、今はパーキンソン病を患っています。彼女は読書好きでマルクスからフッサール、トルストイからバルテ、シメノンからボルニャまで多くの本を読みました。数日前、彼女は自分の人生にとって重要な本としてまなざしの輝きについて話してくれました。わたしが理由を訊ねると、彼女は“わたしがいつも自分自身から隠してきたニヒリズムを発見させてくれたから。これを深めていきたい”と答えました。わたしにとって、今日におけるドン・ジュッサーニのカリスマの存在のしるしは、まさに今世紀の悲劇を愛情深い知性で理解させることです。それはあなたがわたしたちを支配する意味の欠如の意識を持たせるのと同時に、わたしたちに子であることの意識を目覚めさせるからです》。

わたしたちは、まなざしの輝きの第6章、特に最初の3段落で、これらのことを採り上げました。11月のスクオラ・ディ・コムニタの内容になるので、皆読み返すことができます。

《けれども、この父性が存在するだけでは不十分であり、父性に生み出されるままにさせる心の開きが必要です。わたしたちの人生・いのちの豊かさは、子となることに心が開かれているかによります。“イエスがニコデモに言っていたことである。‘再び生まれなければならない’。[...]子となって「彼」に従うことを受け入れる人は、自分の人生に起こり始める新しさに驚くでしょう》¹⁸と書きました。

これから始まる劇的で美しいこの1年、互いに祈りましょう。

聖霊がドン・ジュッサーニに働き、彼を通して働き、彼に起こったこと、彼に強調されてきた方法—生まれ出ていなければ、誰も生むことはできない—のおかげで、今も起こり続けていることに従う開いた心でいる姿を御父に見せることができますように。こうした心の開きに対する責任は、個人的なものです。友人として、それぞれがキリストに《はい》と答えられるよう注意深く支え合いながら、互いの運命を気遣いましょう！